

[A年]受難節第4主日(2025年3月30日)**【旧約聖書日課】出エジプト記 24章3～11節**

3モーセは戻って、主のすべての言葉とすべての法を民に読み聞かせると、民は皆、声を一つにして答え、「わたしたちは、主が語られた言葉をすべて行います」と言った。4モーセは主の言葉をすべて書き記し、朝早く起きて、山のふもとに祭壇を築き、十二の石の柱をイスラエルの十二部族のために建てた。5彼はイスラエルの人々の若者を遣わし、焼き尽くす献げ物をささげさせ、更に和解の献げ物として主に雄牛をささげさせた。6モーセは血の半分を取って鉢に入れて、残りの半分を祭壇に振りかけると、7契約の書を取り、民に読んで聞かせた。彼らが、「わたしたちは主が語られたことをすべて行い、守ります」と言うと、8モーセは血を取り、民に振りかけて言った。「見よ、これは主がこれらの言葉に基づいてあなたたちと結ばれた契約の血である。」9モーセはアロン、ナダブ、アビフおよびイスラエルの七十人の長老と一緒に登って行った。10彼らがイスラエルの神を見ると、その御足の下にはサファイアの敷石のような物があり、それはまさに大空のように澄んでいた。11神はイスラエルの民の代表者たちに向かって手を伸ばされなかったので、彼らは神を見て、食べ、また飲んだ。

【使徒書日課】ペトロの手紙二 1章16～19節

16わたしたちの主イエス・キリストの力に満ちた来臨を知らせるのに、わたしたちは巧みな作り話を用いたわけではありません。わたしたちは、キリストの威光を目撃したのです。17荘厳な栄光の中から、「これはわたしの愛する子。わたしの心に適う者」というような声があって、主イエスは父である神から誉れと栄光をお受けになりました。18わたしたちは、聖なる山にイエスといたとき、天から響いてきたこの声を聞いたのです。19こうして、わたしたちには、預言の言葉はいつそう確かなものとなっています。夜が明け、明けの明星があなたがたの

心の中に昇るときまで、暗い所に輝くともし火として、どうかこの預言の言葉に留意してください。

【福音書日課】**マタイによる福音書 17章1～13節**

1六日の後、イエスは、ペトロ、それにヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。2イエスの姿が彼らの目の前で変わり、顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなった。3見ると、モーセとエリヤが現れ、イエスと語り合っていた。4ペトロが口をはきんでイエスに言った。「主よ、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです。お望みでしたら、わたしがここに仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」5ペトロがこう話しているうちに、光り輝く雲が彼らを覆った。すると、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」という声が雲の中から聞こえた。6弟子たちはこれを聞いてひれ伏し、非常に恐れた。7イエスは近づき、彼らに手を触れて言われた。「起きなさい。恐れることはない。」8彼らが顔を上げて見ると、イエスのほかにだれもいなかった。

9一同が山を下りるとき、イエスは、「人の子が死者の中から復活するまで、今見たことをだれにも話してはならない」と弟子たちに命じられた。10彼らはイエスに、「なぜ、律法学者は、まずエリヤが来るはずだと言っているのでしょうか」と尋ねた。11イエスはお答えになった。「確かにエリヤが来て、すべてを元どおりにする。12言うておくが、エリヤは既に来たのだ。人々は彼を認めず、好きなようにあしらったのである。人の子も、そのように人々から苦しめられることになる。」13そのとき、弟子たちは、イエスが洗礼者ヨハネのことを言われたのだと悟った。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

出エジプト記 24章3～11節

3さて、モーセは戻って来て、主のすべての言葉とすべての法を民に語り聞かせた。民は皆声を一つにして、「主が語られた言葉をすべて行います」と答えた。4そこで、モーセは主の言葉をすべて書き記し、朝早く起きて、山の麓に祭壇を築き、イスラエルの十二の部族にちなんで十二の石柱を建てた。5さらに、モーセはイスラエルの人々のうちから若者たちを遣わした。彼らは数頭の雄牛を焼き尽くすいけにえと会食のいけにえとして主に献げた。6モーセは血の半分を取って小鉢に入れ、血のもう半分は祭壇に打ちかけた。7そして、その契約の書を取り、民に読み聞かせた。すると彼らは、「主が語られたことをすべて行い、聞き従います」と言った。8そこで、モーセは血を取り、民の上に振りかけて言った。「これは、主がこのすべての言葉に基づいてあなたがたと結ばれる契約の血である。」9さて、モーセは、アロン、ナダブとアビフ、およびイスラエルの七十人の長老と共に登って行って、10イスラエルの神を仰ぎ見た。その足の下にはラピスラズリの敷石のようなものがあり、澄み渡る天空のようであった。11神はイスラエルの人びとの指導者たちを手になかなかたので、彼らは神を見つめて、食べ、また飲むことができた。

ペトロの手紙二 1章16～19節

16私たちは、私たちの主イエス・キリストの来臨をあなたがたに知らせるのに、巧みな作り話に従ったではありません。この私たちが、あの方の威光の目撃者だからです。17イエスが父なる神から誉れと栄光を受けられたとき、厳かな栄光の中から、次のような声がかかりました。「これは私の愛する子。私の心に適う者。」18私たちは、イエスと共に聖なる山にいたとき、

天からかかったこの声を聞いたのです。19こうして、私たちは、預言の言葉をより確かなものとして持っています。夜が明け、明けの明星があなたがたの心の中に昇るときまで、暗いところに輝く灯として、この言葉を心に留めておきなさい。

マタイによる福音書 17章1～13節

1六日の後、イエスは、ペトロ、それにヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。2すると、彼らの目の前でイエスの姿が変わり、顔は太陽のように輝き、衣は光のように白くなった。3見ると、モーセとエリヤが現れ、イエスと語り合っていた。4ペトロが口を挟んでイエスに言った。「主よ、私たちがここにいるのは、素晴らしいことです。お望みでしたら、ここに幕屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのために。」5ペトロがこう話しているうちに、光り輝く雲が彼らを覆った。すると、雲の中から、「これは私の愛する子、私の心に適う者。これに聞け」という声がした。6弟子たちはこれを聞いてひれ伏し、非常に恐れた。7イエスは近寄り、彼らに手を触れて言われた。「立ち上がりなさい。恐れることはない。」8彼らが目を上げて見ると、イエスのほかに誰もいなかった。9一同が山を下っているとき、イエスは、「人の子が死者の中から復活するまで、今見たことを誰にも話してはならない」と弟子たちに命じられた。10彼らはイエスに、「なぜ、律法学者は、まずエリヤが来るはずだと言っているのでしょうか」と尋ねた。11イエスはお答えになった。「確かにエリヤが来て、すべてを建て直す。12言うておくが、エリヤはすでに来たのだ。しかし、人々は彼を認めず、好きなようにあしらったのである。人の子も、同じように人々から苦しめられることになる。」13その時、弟子たちは、イエスが洗礼者ヨハネのことを言われたのだと悟った。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・3月30日「受難節第4主日」の日課主題は「主の変容」。

・旧約日課は、「出エジプト記」から、シナイ山における契約締結式を物語る箇所。使徒書日課は、「ペトロの手紙二」から、ペトロが高い山での信仰体験について触れる箇所。福音書日課は、「マタイによる福音書」から、主イエスの高い山での変貌を物語る箇所。

旧約日課(出エジプト 24 章より)

・「出エジプト記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「律法(トーラー)」の第二巻、「申命記」までの四巻で続く「モーセ物語」の第一部を構成する。「モーセ物語」は、モーセの誕生から死までの物語として構成されているが、物語の枢要は、モーセがイスラエルの民をエジプトから導き出す「出エジプトの出来事」と、それに続く「シナイ山における律法授与と契約締結の出来事」に集中している。これらのことは、第一部を構成する「出エジプト記」の12～24章で物語られ、さらに第四部を構成する「申命記」の1～28章でモーセ自身によって再話される形式で物語られている。そこで示されるのは、「創世記」の「族長物語」(創12～50章)を踏まえた「ヤコブの子孫」としての「イスラエル」を仮説的に前提としながら、モーセがエジプトから導き出した「種々雑多な人々」(出12:38)を含む人々がシナイ山で授与された「主の言葉(と法)」に基づく「契約」をもって「イスラエルの民」とされるという、「契約の民としてのイスラエル」の定義である。そこで前提とされる「出エジプト」は、「主の過越の出来事」(出12章)で描かれるように、主なる神が一方向的に救済の道を教え示し、それに応じた人々を対象としたものであり、「シナイ山での契約」が「恵みに基づく契約」としての性格のものであることを示している。

・日課箇所の一連の描写は、契約締結のための一連の儀式を展開しているものと考えられる。ここで「契約の書」とされるものは、モーセが主から授与された「主のすべての言葉(ダーバール)とすべての法(ミシュパト)」(3節)を指していると考えられるが、「言葉(ダーバール)」の用語が繰り返されている(3節、4節、7節「語られたこと」、8節)のに対して、「法(ミシュパト)」は繰り返されていない。「すべての言葉」と「すべての法」は、文脈から、20:1「これらすべての言葉」で始まるいわゆる「十戒」部分(20:2～17)と、21:1「彼らに示すべき法」で始まる一連の法規定(21:2～23:19)に対応するものと考えられる。他方で、これらに並ぶ20:22～26および23:20～33は、「十戒」や「法」とは性質を異にする「祭儀的な誓約関係維持を目的とする契約文書」となっており(実際、「新共同訳」では20:22に「契約の書」という大見出しを付している)、日課箇所中の「契約の書」はこれを指すとも考えられる。

・8節「契約の血」という表現は、旧約中ではゼカリヤ9:11にも見られる。また、新約では、「主の晩餐」における主の言葉(マタイ26:28、マルコ14:24)の中に見られるほか、ヘブライ書も繰り返し用いており(ヘブ9:20、10:29、13:20)、これらは、日課箇所を踏まえた用法と解される。

・9節「アロン」は、モーセの兄であり主要な協力者として「モーセ物語」中で繰り返し描かれる人物。「ナダブ、アビブ」は、アロンの子ら(6:23)。

使徒書日課(Ⅱペトロ 1章より)

・「ペトロの手紙二」は、「公同書簡集」の一つに数えられる書簡文書。「手紙一」と共に「使徒ペトロ」によって著された書簡とされているが、古くから偽書の疑いが向けられてきた文書でもある。また「手紙一」が早くに諸教会で正典として受け入れられていたの対して、本書簡が広く正典として受け入れられたのは4世紀以降である。本書簡は、「ヨハネの黙示録」と並んで終末論的思想を強く示唆する記述が多く含まれており、古代教会で終末論思想の受容に温度差(東方教会は否定的立場)があったことも、正典受け入れが遅れた理由と考えられている。他方で、本書簡には、日課箇所のように「福音書」で伝えられている主イエスの公生涯の出来事への言及が見られたり、「パウロ書簡」への言及があり(3:15)、早くに諸教会で受容されていた「四福音書」や「パウロ書簡集」を共有する「古カトリシズム(公同教会主義)」の教会ネットワークの中で著され、受け継がれていたことがうかがえる。なお、古代教会における正典認定では、その文書の「使徒性」が重要な判断材料とされていたことが知られている。

・日課箇所で言及されている体験は、共観福音書が「主イエスの山上の変容」として共通して伝えている出来事(マタイ17:1～8、マルコ9:2～8、ルカ9:28～36)を踏まえている。17節「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」は、マタイ17:5とほぼ同じ表現で記されており、「マタイ福音書」を参照した可能性も否定できない。

・16節「来臨」の原語は「パルーシア」で、本書簡で3用例ある(3:4,12)。「福音書」では、共観福音書が共通して伝えている「主イエスの小黙示録」と呼ばれる一連の教えの中で、マタイだけが繰り返し用いている(マタイ24:3「来られて」、27節「来る」、37節「来る」、39節「来る」)。「福音書」以外では、「パウロ書簡集」で広く用例(14例)が見られるほか、「ヤコブ書簡」(2例)、「Iヨハネ書簡」(1例)にも見られる。いわゆる「再臨」信仰を示すものとして解されてきたが、「パルーシア」の原義は「傍に在ること/臨在」を意味する語(「パラ」+「エイミ」)であり、終末的な再臨に限定されるものではない。この用例のある「マタイ福音書」では、「インマヌエル」(マタイ1:23)の語で象徴的に示される「神は我々と共におられる」という現臨信仰を主イエスにまで拡大している(28:19「わたしは・・・いつもあなたと共にいる」)ことが解釈の前提となる。

福音書日課(マタイ 17 章より)

・日課箇所は、「主イエスの山上の変容」として知られる伝承説話で、前段に置かれている「ペトロの信仰告白および主イエスの受難予告」の説話、また後段の「悪霊に憑かれた子を癒し、二度目の受難予告をする」までの一連のイエス伝承のまとめ(前回資料参照)の中にある。

・共通して伝えている共観福音書の各書は、この箇所の扱いに、それぞれ独自の解釈を適用していると推認される。「マタイ」と「マルコ」は、山上の出来事を経験した後、下山に際して主イエスと弟子たちの対話で「エリヤ」に関連する事柄が取り上げられたとされるが、「ルカ」はこれを削除している。また、この下山時の逸話を、「マルコ」は、弟子たちが「死者の中から復活すること」を巡る議論があったこととして描き、前段の「主イエスの受難予告」を伏線とした描写にしているが、「マタイ」は、前段との関連を打ち消して、話題を「洗礼者ヨハネについての理解」に極力シフトさせようとしていると解される。

・5 節「これはわたしの愛する子。わたしの心に適う者」は、主イエスの洗礼に際して天から響いたとされる言葉(3:17)と完全に一致する。この洗礼に際しての言葉を、「マルコ」と「ルカ」は、「あなたは…」と二人称の呼びかけで伝えており、「マタイ」は、日課箇所に一致させるために「これは…」に置き換えたのかもしれない。いずれにしても、共観福音書は、両説話をこの言葉で関連させることによって、主イエスの「洗礼」と「山上の変容」と同質のものとして理解する初期教会の理解を明らかにしている。それは、同時に、弟子たちの教会が実践する「洗礼」理解にも方向性を与えている。

来週の誕生日 (3月30日～4月5日)**主日礼拝の讃美歌から**

・21-128「悪は罪人の」(= II 110)は、16 世紀スイス・ジュネーブの教会改革を指導した J.カルヴァンがフランス語の詩編歌 36 編として作詞。曲は、1525 年発行のストラズブル聖歌集所収のドイツ語詩編歌 36 編のためにマテウス・グライターが作曲。同じ曲が 294 番でも用いられているが、『讃美歌 21』では異なる記譜で用いられてきたとおりに採用。

・21-285「高き山の上」(= II 44 番)は、15 世紀英国のセーラム典礼聖務日課書に「イエスの変貌の祝日」のための聖歌として収められたラテン語聖歌。曲は、18 世紀フランスで発行された聖歌集から。

・21-502「光のある間に」(= I 326「ひかりにあゆめよ」)は、19 世紀英国の「クエーカー詩人」として知られるバーナード・バートンの詩集(1836 年発行)所収の歌詞。I ヨハ 1:7 の聖句に基づく詩だが、日本語版ではヨハネ 12:36 に基づいて改変されている。曲は 18~19 世紀英国のチェロ奏者サミュエル・スタンレーが詩編 23 編の詩編歌のために作曲。この讃美歌は

歌詞も曲も、英語圏の教派讃美歌集では 20 世紀中葉以降、採用されていない。

・21-288「恵みにかがやき」は、19 世紀英国でブレザレン派の団体に所属したアイルランド出身の信徒エドワード・デニーが「千年至福説(ディスペンセーション主義神学←契約神学の対極に位置づけられる)」に基づいて作詞。曲は、19 世紀英国の教会音楽家 W. ハヴァガルの原曲を米国の教会音楽家 L.メーソンが編曲したもの。

21-285「高き山の上」***O Wondrous Type (O Wondrous Sight)***

1. O wondrous type! O vision fair / Of glory that the Church shall share, / Which Christ upon the mountain shows / Where brighter than the sun He glows!
2. From age to age the tale declare / How with the three disciples there, / Where Moses and Elias meet, / The Lord holds converse high and sweet.
3. With shining face and bright array, / Christ deigns to manifest to-day / What glory shall be theirs above / Who joy in God with perfect love.
4. And faithful hearts are raised on high / By this great vision's mystery; / For which in joyful strains we raise / The voice of prayer, the hymn of praise.
5. O Father, with the eternal Son, / And Holy Spirit, ever One, / Vouchsafe to bring us by Thy grace / To see Thy glory face to face. / Amen.

21-502「光のある間に」***Walk in the light: so shalt thou know***

1. Walk in the light: so shalt thou know / That fellowship of love / His Spirit only can bestow / Who reigns in light above.
2. Walk in the light: and thou shalt find / Thy heart made truly his / Who dwells in cloudless light enshrined, / In whom no darkness is.
3. Walk in the light: and thou shalt own / Thy darkness passed away, / Because that light hath on thee shone / In which is perfect day.
4. Walk in the light: and thine shall be / A path, though thorny, bright; / For God, by grace, shall dwell in thee, / And God himself is light.

21-288「恵みにかがやき」***What grace, O Lord, and beauty shone***

1. What grace, O Lord, and beauty shone / around Your steps below! / What patient love was seen in all / Your life and death of woe!
2. For ever on Your burdened heart / a weight of sorrow hung, / yet no ungentle, murmuring word / escaped Your silent tongue.
3. Your foes might hate, despise, revile, / Your friends unfaithful prove; / unwearied in forgiveness still, / Your heart could only love.
4. O give us hearts to love like You, / like You, O Lord, to grieve / far more for others' sins than all / the wrongs that we receive.
5. One with Yourself, may every eye / in all of humankind / behold that grace and gentleness / which, Lord, in You we find.